第十章　滿洲國承認問題

滿洲國承認問題ニ關シ外務省トノ意見交換

前記ノ通リ日本及滿洲デハ速急承認ノ聲ガ高ク、聯盟ハ之ニ刺戟セラレ反對ノ空氣デ横溢シテ居ル。此雰圍氣内ニ在ッテ事態ヲ觀測スルニ、若シ帝國政府ガ此際承認ヲ決行スレバ、小國側ト直チニ正面衝突ヲ爲シ、大國連モ手ノ出シ樣ガナク、小國側ニ引ズラレル虞ガ多分ニアルカラ、日本ハ拔差ナラヌ破目ニ陷ッテ、結局聯盟脱退迄進マネバナラヌカモ知レヌ樣ニ思ハレタ。ソシテ當時日本ハ滿洲國承認ノ不可避性乃至必然性ニ付、世界ノ正解ヲ得ル爲メ未ダ啓發處置ガ充分ニ行屆イテ居ナカッタカラ、之ヲ斷行スルノハ時期尚早デ唯承認一點張デ進ンダノデハ、列强殊ニ米國トノ關係モ懸念サレルニ就テハ何トカ好イ考案ヲ見出シタイモノト種々腐心シタガ、夫レニハ先ヅ第一ニ我政府ノ意嚮ヲ知ル必要ガアル、恰モ内田伯ガ七月六日外務大臣ニ親任セラルル豫定デアリ、十二日頃ニハ「リットン」卿一行ト會見ノ筈デ、又筆者ハ土耳其ノ聯盟加入承諾ノ爲メニ開カレル總會ニ列席ノ爲メ七月六日壽府ニ赴キ、軍縮會議ニ出張中ノ松平、佐藤兩大使及「ローザンヌ」會議ニ參列中ノ吉田茂大使ト打合セスル積リ故、七月四日巴里ヨリ豫メ谷亞細亞局長ニ宛テ(一)「リットン」委員會ハ滿洲問題ノ解決策トシテ如何ナ考案ヲ持ッテ居ルカ、又帝國政府ハ如何ナル方針デ之ヲ指導シ、如何ナ趣旨ノ報告ヲ書カセタイ希望デアルカ、歐洲殊ニ壽府方面ノ空氣ヲ參酌シテ意見上申ノ機

會ヲ我々ニ與フル爲メ、以上ニ關スル情報ヲ得タイ、(二)先般壽府ヲ實見シタ空氣カラ察スルト、若シ日本ガ「リットン」報告ノ提出前ニ滿洲國ヲ承認スル樣ナコトガアレバ、聯盟方面ハ蜂ノ巣ヲツツキタルガ如ク騷ギ出ス虞ガアルカラ、承認決行ノ場合ニハ、其前ニ次デ起リ得ベキ紛糾ニ處スベキ對策ヲ愼重考慮ノ上、確立シ、萬遺漏ナキヲ期スル樣ニサレタイト電報シタ。

右ニ對スル谷局長ノ返事ハ七月七日壽府ニ屆イタ、(一)ノ點ニ付テハ未ダ「リットン」委員會ト意見ノ交換ガ行ハレテ居ラヌ故、其考案ヲ推測假定シテ、之ニ對スル局長ノ所信ヲ云フテ來タニ過ギヌガ、委員會側デ持ッテ居ルノハ先ヅ下ノ如キ諸案カト思ハレル、(イ)支那ハ日本ノ既得權益尊重ヲ誓約シ、滿蒙ニ對スル統治權ヲ回復スル案、(ロ)支那ノ宗主權ノ下ニ滿蒙ニ自治ヲ認ムル案、(ハ)聯盟ノ責任ヲ負フベキ滿蒙國際行政案、(ニ)九國條約又ハ不戰條約關係列國ノ協助ニ依リ滿蒙問題ヲ決定スル案、(ホ)決定ヲ後日ニ延バシ暫ク滿洲國ノ事態ノ推移ヲ見極ムル爲メ、常設的滿蒙委員會ヲ設定スル案。以上ニ對スル谷局長ノ考ハ、滿蒙問題解決ノ基幹ハ、第一ニ永久的性質ヲ有スルヲ要スルコト、第二ニ將來ニ對スル禍根ヲ排除スルコト、就中滿洲國成立ノ事實ヲ無視シテハナラヌ、故ニ前記ノ諸案ハ孰レモ此基幹ト合致セザルノミナラズ、滿洲國ハ九國條約及不戰條約ノ當事國デナイカラ、(ニ)ノ案ハ不合理デアル、殊ニ日本ハ滿洲國併合ノ意圖ヲ有セヌコト、及滿洲國成立ノ今日デハ滿洲ノ處分ニ付日支直接交渉ヲ行フノ不可能ナルコト等ヲ「リットン」委員會ニ說明シ、結局帝國政府トシテハ滿洲國ヲ承認シ、之ヲ守リ立テ行クノ外ナシト思考シ居ル旨ヲ告グルト共ニ、聯盟側ニ於テハ暫ク事態ノ成行ヲ見送ラレタク、現實ノ狀況ニ合セザル限リ、解決案ヲ出スコトハ

却テ事態ヲ惡化スルノミダト應酬方、大臣ニ進言シタイト考ヘテ居ル。又(ニ)ノ點ニ關シテハ、帝國政府ガ滿洲國承認ノ決意ヲ有シ、出來得ル限リ速ニ之ヲ實行シタキ考ヲ持ツテ居ルノハ云フ迄モナイガ、唐突ニ之ヲ行ハムトスルモノデハナイ、諸般ノ關係、影響ヲ注意シ、充分ナル準備ノ下ニ之ヲ行フ積リデアル、然ルニ日本モ「リットン」報告ノ提出前ニ承認スルニ於テハ、聯盟方面ハ蜂ノ巣ヲツツキタルガ如キ形勢トナルベシト想像サルル由ノ所、右ハ如何ナル事態ヲ想像サルル次第ナリヤ、例ヘバ聯盟側ニテ何等積極的ニ出ヅルガ如キ虞皆無ナラズトノ意ナリヤ、而シテ承認時期ガ「リットン」報告提出ノ前後ニ依リテ、聯盟ニ與フル影響ニ大差アリトノ見込ナリヤ等　當方準備ノ參考ニ資シタイカラ返事シテ吳レト云フテ來タ。

此電報ヲ受取ツタ筆者ハ「ローザンヌ」會議ノ終了ヲ待チ、其日(七月九日)ノ夜一同松平大使ノ所ニ集マリ篤ト意見ノ交換ヲシタ、承認問題ニ付テハ諸員ノ意見直チニ一致シタノデ、翌日左ノ電報ヲ內田外相ニ發シタ。

滿洲國承認問題ニ關スル當方面ノ空氣ハ、規約第十條ニ報告期間延長ニ關スル議長書翰並ニ七月一日總會ニ於ケル議長ノ聲明及各代表ノ陳述等ニ徵シ、御想像相成ベキ通リ、頗ル神經過敏トナリ居リ、若シ此際承認ヲ決行センカ、之ヲ以テ客年以來ノ聯盟決議ノ精神ヲ蹂躙セル行爲ナリト解シ、我行動ニ對シ盛ニ非難攻擊スルコトト豫測セラル、此場合我方トシテ之ニ對抗スベキ議論ヲ立テ得ベキモ、形勢ノ推移ニ依リテハ、或ハ聯盟脫退ヲモ覺悟セザル可ラズ、然ルニ「リットン」委員會ハ我方ノ提議ニ依リ設ケラレ、而シテ今ヤ將ニ問題ノ核子ニ觸レントスル時機ニ到達シタルニ拘ラズ、其報告提出前早キニ及ンデ承認スルニ

於テハ、實質的ニ其進言ノ自由ノ一部ヲ奪フ結果トナリ、世界ニ對シ日本ノ行動ガ公正ニ非ズトノ誤解ヲ抱カシムルコト當然ト思ハルルニ付テハ、右ヲ前提トスル紛糾ノ結果、日本ガ已ムナク聯盟脫退ヲ敢行スルガ如キ歸結ヲ生ゼバ、假令聯盟側モ經濟封鎖ト云フガ如キ積極的行動ニハ出デザルベキモ、滿洲國不承認ノ申合セヲナスガ如キ事態ヲ惹起セズトモ難計、日本ニ對スル世界ノ同情ハ全然消散スルニ至ルベキヲ虞ル、仍テ此際兎モ角モ「リットン」報告提出ヲ差控ヘ、同委員會ノ顏ヲ立ツルト共ニ、我態度ノ公正ナルコトヲ示シ置クニ於テハ、將來「リットン」報告乃至聯盟ガ到底我方ノ受諾シ得ザル解決策ヲ提議シ來リタル場合、堂々我方立場ヲ主張シ得、萬一之ガ爲メ聯盟脫退迄進ムトスルモ、列國ノ我ニ對スル誤解及反感ハ前記ノ場合ニ比シ餘程緩和スベシト思考セラルルノミナラズ「リットン」報告ノ內容或ハ聯盟ニ於ケル國際輿論ノ推移ニ依リ、我方ノ承認亦已ムヲ得ズトノ結果ヲ得ラレザルニモ非ズト思考ス。承認問題ニ對スル我國輿論ノ趨向ニ付テハ、當方ニ於テモ十分了解シ居リ、承認遷延ノ困難ナル事情モ、篤ト御推察申上ゲ居ル次第ナルモ、本問題ノ重大性ニ鑑ミ、本使當地出張中ヲ幸ヒ、松平、佐藤、吉田三大使其他外務諸官ト熟議ノ結果、卑見申進ムル次第ナリ。

承認問題ニ付テハ筆者モ充分ニ熟考シタ。何ニセヨ軍縮會議ガ續イテ居ル間ハ、各國代表ガ悉ク壽府ニ居ル故、何時デモ十九人委員會乃至總會ヲ招集スル便宜ガアルノミナラズ、小國ノ代表連ハ事アレカシト興味ヲ以テ待ツテ居ル有樣ナノダカラ、支那ガ少シデモ策動スレバ、得タリト許リニ活動ヲ開始スル、日支事件ハ彼等ニ取ツテハ軍縮會議ノ暇ナ時キ時間ツブシデ、一種ノ娛樂材料ナノダ、彼等自身トシテモ又其代表スル

國家トシテモ、事件ガ如何ニ解決サレ樣ガ少シモ痛痒ヲ感ゼヌノダカラ、事態ノ眞相ヲ窮メル爲メニ研究ノ勞ヲ取ル樣ナ眞劍味ヲ持ツテハ居ラヌ、單ナル思ヒ付デ辯論ヲ弄ブニ過ギヌノダカラ、斯クノ如キ容態デ一國ノ死活ヲ賭スル問題ヲ取扱ハレテハ、其國ハ全ク堪ッタモノデハナイ。彼等ハ口癖ノ樣ニ決シテ日本ニ楯ツクノデハナイ、斯樣ナ考ハ少シモ持ツテ居ラヌシ、又滿洲問題ノ特異性モ能ク了解スルガ、歐洲ニ事ノ起ッタ時之ヲ先例トシテ口實ヲ作ラレテハ堪ラヌ故、豫メ善處セントスル用意ニ過ギヌト、辯解ケ間敷我々ニ對シテ釋明スルヲ常トスルガ、若シ歐洲ノ一國ガ其死活問題ニ直面シ、又充分ニ其實力ヲ自覺スル場合、今獅子吼シテ居ル連中ノ聲ガ、何ノ役ニ立ッデアロウカ、事實將來ノ事ヲ考ヘテノ彼等ノ行動デアルナラバ、之ハ餘リニ自己ノ力乃至聯盟ノ功德ヲ買ヒカブリ過ギタ妄想デ、殆ンド批評ニ値セヌ愚論短見デアル。孰レニセヨ此有樣ダカラ、軍縮會議ノ開カレテ居ル間ハ、出來ルコトナラ承認ヲセヌ方ガ我國トシテ利口ナ遣リ口デアル。幸ニ軍縮會議モ遠カラズ一段落付ク模樣ニ見エ、各國代表ヤ聯盟事務局員ハ長イ會議ニ倦キテ暑中ノ休養ニ出掛ケルデアロウカラ、若シ事情已ムヲ得ヌ場合ニハ、此時機ヲ見計ヒ、聯盟定時總會ノ爲メニ彼等ガ再ビ集マッテ來ヌ前ニ、承認ヲ決行スルノガ可然ダト思ハレタ。然ルニ規約第十二條ノ報告提出期間延長問題審議ノ最中、我衆議院ノ爲シタ速急承認決議ハ、前述ノ如ク著シク聯盟ノ神經ヲ刺戟シ、支那ノ策動ヲ容易ニシタ爲メ、七月初旬ノ空氣デハ筆者ガ以前ニ考ヘテ居タ八月中旬承認ノ腹案モ、相當大事ヲ取ラヌト取返シノ付カヌドチヲ履ム虞ガアル、殊ニ右カラ左ニ承認ヲ敢行サレル樣ナコトデモアレバ、夫レコソ國家ノ一大不利益ダト思フタノデ、前記ノ電報ヲ認タメ、谷局長ヘノ返電トセズニ、直接內田外相ニ發送シ

タノデアル。

滿洲國今後ノ處理ニ付テハ、谷局長ノ電報デ日本ノ意嚮ハ概ネ了解スルコトガ出來タ、壽府ニ在ル筆者ノ觀察デハ、斯クノ如キ排他的一本調子デ進ムコトハ、當時ノ情況上非常ニ危險ナルガ如ク思ハレザルヲ得ナカッタ。差當リ名義丈ケノ宗主權ヲ支那ニ認メテ、主權ノ行使全部ヲ滿洲國ニ收メ、時機ヲ見テ支那トノ絆ヲ絕ッ趣向デ、問題ヲ處理スルコトガ出來タラ、調査團中最モ日本ニ理解アリト看做サルル佛國「クローデル」將軍ノ意見ト合致シ、列强ヲ我方ニ誘致スル結果トモ成ルベク、少ナクモ佛國ヲ抱擁シテ我工作ヲ容易ナラシメ、支那ヲ屈從サセ得ル公算ガ甚ダ多イト考ヘタガ、斯クノ如キ進言ハ到底當時ノ日本ノ空氣ニ受入レラルル見込ナキ故、筆者ハ左ノ電報ヲ七月十日谷局長ニ送ッタ。

滿洲問題ニ關シテハ聯盟方面ニテモ何トカシテ適當ノ口寶ヲ設ケ手ヲ引キタキ氣分モアルヤニ看取セラルルニ付、此際好ンデ事ヲ荒立テズ、何等カ聯盟ニ事柄ヲ辨ヘッツ、實際上滿洲ニ於ケル我方ノ立場ヲ確保スル方針ヲ定メ、適宜之ヲ「リットン」委員會ニ提示シ、同委員會ヲシテ之ヲ聯盟ニ「リコンメンド」セシムルヲ最良ノ方策ト思考スル處「リットン」報告ハ聯盟側ガ之ヲ金科玉條トシテ日支事件解決ノ基礎ニ供スベキニ付、其結論ニ於テ具體的解決案ヲ揭グル場合、若シ帝國ガ之ニ同意シ能ハザル種類ノ考案タルニ於テハ、有害無益ニ付、同報告書ハ支那乃至滿蒙ノ事態報告ニ止ムルコトトシ、滿洲ノ「ステータス」ニ付テハ何等ノ解決案ヲモ記入セシメズ、右ハ利害關係國間ニ協議決定スベキモノナリトノ趣旨ヲ「サジエスト」セシメ、一面聯盟ヲシテ滿洲問題ヨリ手ヲ引ク機會ヲ與フルト同時ニ、他方我方ノ立場ヲ自由ニ

シ置ク樣措置スルヲ得バ最モ得策ト存ズ。

滿洲問題ノ解決ニハ結局英米トノ諒解ヲ要スベキコト申ス迄モナキ次第ナルニ付、承認問題ニ關聯シ六月二十三日在京英國大使ヨリ「九國條約ハ滿洲ガ其獨立ヲ宣言スルヲ禁ズルモノニ非ズト雖、締約國ハ斯クノ如キ行爲ヲ奬勵セザル義務ヲ負ヒ、若シ日本國政府ニシテ其條約上ノ義務ニ違反シテ行動シツツアリトノ印象ヲ避ケント欲セバ、特別ノ注意ヲ拂フコト必要ナリ」トノ申入ヲ爲セルヲ機會ニ、早キニ臨ンデ英米等直接利害關係アル國ニ對シ、我國ガ承認ヲ爲サザルヲ得ザル事態ニアルコトヲ明カニシ　是等諸國ガ將來滿洲國ニ對シ如何ナル事態ニ出ヅベキヤヲ確カメ、其意嚮ヲモ參酌シテ善後處置ヲ講ズルコト肝要ト存ズ。

内田外相ト「リソトン」卿トノ會見

「リットン」委員會ハ滿洲ノ調査ヲ終リシ後北京ニ引揚ゲ、七月四日東京ニ再來シタ。同委員會ノ報告書起草地ニ關シ、我國ハ中立性多キ青島ヲ主張シタガ、委員等ハ我提言ヲ斥ケ北京ヲ選ンダ、之ニ付テハ各種ノ風評ガ在リ、決シテ委員會ニ對スル心證ヲ善クスル所以デハ無カッタ。「リットン」卿一行ハ七月十二日及十四日内田外務大臣ト會談シタ、其主題ガ滿洲國ノ承認問題デアッタノハ云フ迄モナイコトデ、彼等ハ何トカシテ支那ニ多少ノ花ヲ持タセ、本件ノ圓滿解決ヲ計ルニ腐心シタガ、内田外相ノ應待振ハ彼等ヲ著シク失望サセタニ相違ナイ、左ニ會談ノ内容ヲ紹介スル。

昭和七年七月十二日午後三時ヨリ四時十分迄外務省大臣室ニ於テ會見。

「リットン」卿　本委員等ハ大連ニ於テ閣下ト會談ノ機ヲ得タルガ、其後各方面ヨリモ種々ノ意見ヲ聽キタリ、又吉田伊三郎參與委員ノ名ニ於テ提出セラレタル書類ニ依リテモ亦日本ノ利益及重要ナル要求ニ就キ承知セリ、又過日東京ノ途次吉田參與委員ヨリ受取リタル「デエローム、グリーン」氏ノ「東亞事情」ヲモ一讀シタルガ、其中ニ滿洲ニ於ケル日本ノ軍略上ノ立場及日本ハ滿洲ヲ併呑スルノ意圖ヲ有セズトノ二點記載セラレアリ、右ハ日本ノ主張ノ的確ナル記述ナリト思考セラルルガ、日本ノ要求ヲ支那ノ滿洲ニ於ケル權利ト調和セシムルコトヲ得ザルベキヤ、本委員等ハ大連ニ於テ受領シタル閣下ノ覺書中ニ、解決案トシテノ併合其他ノ方法中、滿洲國ノ承認ガ最良ノ方策ナリト述ベラレアルヲ想起ス、然ルニ自分ノ考ニ據レバ、滿洲國ノ承認ニハ二ノ前提ヲ必要ト思考ス、一ハ滿洲ニ對スル支那ノ侵略アリタルコト、二ハ滿洲國ハ人民ノ自決權ニ依リ成立シタルコト卽チ之ナリ、若シ此二ツノ點ニ付證明ヲ得ザレバ、承認論ハ其根據ヲ失フベシ。

自分ハ日本國政府ガ滿洲國ヲ承認スルコトヲ決意セラレタリヤヲ伺ヒタシ、又若シ日本國政府ガ他ノ解決案ヲ考ヘ居ラルレバ夫レモ伺ヒタシ、此點ニ付閣下ノ政策ト、其理由ヲ承知スルヲ得バ幸ナリ。

内田外相　本大臣ハ歸京後採ルベキ方策ニ付研究シタルガ、本大臣ガ個人トシテ大連ニ於テ述ベタル私見ヲ變更スベキ何等ノ理由ヲ見出スコトヲ得ズ、本問題ノ唯一ノ解決策ハ、滿洲國ヲ承認スルニ在リ、本大臣ハ他ノ滿足スベキ「オルターネチヴ」ヲ見出サザルモ、若シ貴委員等ニ於テ他ノ「オルターネチヴ」アラ

バ喜ンデ伺フベシ。

「リットン」卿、芳澤前大臣ハ日本ノ權益ガ擁護セラルルニ於テハ、滿洲ニ於テ如何ナル行政組織ガ形成セラルルモ、日本ハ大ナル關心ヲ有セズト述ベラレタリ。

内田外相、右ハ滿洲國成立前ナルガ故ナルベシ、新國家ノ成立ハ貴委員等ノ東京出發後ト承知ス。

（此際「シュネー」委員ハ自分等ガ着京シタルハ二月二十九日ニシテ、三月八日東京ヲ出發セリ、滿洲國ノ出現ハ其後ノ事件ナリト述ブ）

内田外相、滿洲國ノ存在ハ現實ノ事實ニシテ、之ニ依リ全般ノ事態一變セリ、吾人ハ此事實ヲ無視スルコトヲ得ズ。

「リットン」卿、滿洲國ノ範圍如何。

内田外相、地理的範圍ヲ意味セラルルコトト思考スルモ、滿洲國ガ主張スル如ク、東北四省及蒙古ヲ指ス。

「リットン」卿、蒙古トハ何ヲ指スヤ。

内田外相、黑龍江省ノ一部ヲモ含ム地域ヲ指スモノナルガ、其範圍ニ就テハ、一般ニ明確ニ了解セラレ居ラズ。

「リットン」卿、地理的區域ガ明カナラザレバ承認ハ困難ナルベシ、地理ニ依リテ其範圍ヲ知リタシ。

内田外相、其範圍ハ滿洲國ノ聲明セル所ニ依リ明カニシテ、地理ニ依リ之ヲ確ムルコトヲ得ベシ。

「リットン」卿、自分ハ右ヲ承知シタシ。承認ト九國條約ノ關係國トノ關係如何。

内田外相　滿洲國承認ハ何等九國條約ト牴觸セズ。

「リットン」卿、滿洲國ハ支那ノ一部ナルヲ以テ、之ガ「ステータス」ノ變更ニ關シテハ日本ハ、條約ニ基キ關係國ト討議スル必要ナキヤ。

内田外相、其必要ヲ認メズ、滿洲國ハ滿洲人ニヨリ自發的ニ創成セラレタル國家ニシテ、右ニ對シ九國條約ガ適用セラルルモノトハ思考セズ。滿洲國ハ九國條約ノ當事者ニ非ズ。

「リットン」卿、然レドモ該地域ハ九國條約當事國ノ一部ナリ、同條約ニハ支那ノ獨立領土保全云々ト規定シアリ。

内田外相、九國條約ハ滿洲國ニ適用アルモノト思考セズ。支那ハ議論ヲ爲シ續クベキモ、日本ニトリ重大ナル關係ヲ有シ、結局支那側モ自ラ採ルベキ道ヲ見出スベシ、若シ日本ガ滿洲ヲ併合セントスルモノナラバ自ラ別個ノ問題ナルベキモ、日本ハ滿洲國ヲ承認セントスルモノナリ。

「リットン」卿、併合ノ方寧ロ可ナリ、此方ガ日本ハ現在ヨリ優秀ナル官吏ヲ送ルコトトナルベキヲ以テナリ

内田外相、我々ハ滿洲國ニ官吏ヲ送リタルニ非ズ、滿洲國ガ或種日本人ヲ傭聘シタルノミ。

「リットン」卿、日本ハ御承知ノ如キ「タイプ」ノ人物ヲ送ラレタリ。

内田外相、固ヨリ必要ヲ認ムレバ、滿洲國政府ハ是等官吏ヲ取代ヘルコトアルベシ。

「リットン」卿（他ノ委員ニ向ヒ、本問題ニ付外務大臣ニ質問ノ點アラバ、發言アリタシト述ブ）

「マツコイ」將軍、自分ハ米國政府ヲ代表スルモノニ非ズ、自分ノ述ブル所ハ個人ノ意見ナルガ、啻ニ日本

ニ對シテノミナラズ、露國及支那ニ對シテモ重要問題ナリ、閣下ハ滿洲ハ日本ノ國防上重要ナリト云ハルルモ、其點ハ支那露國ニ取リテモ同樣ナルベシ、自分ハ日本ガ重大ナル措置ニ出デラルル前ニ、充分考慮ヲ廻ラサルルコトヲ期待ス、日本ハ從來非常ニ妥協的態度ヲ取ラレ來リタルモ、滿洲國ノ承認ハ聯盟規約九國條約不戰條約ト牴觸ストノ意見歐洲方面ニ在リ、若シ日本ガ滿洲ヲ承認スルニ至ラバ、世界ニ對シ不利ナル道德上ノ立場ニ置カルベキコトヲ虞ル、閣下ハ日本ノ外交並ニ內政ノ問題ヲ最モ能ク了解セラレ居リ、且ツ不戰條約ノ調印者ニシテ、閣下ニ期待スル所多シ、只申上ゲタキハ、自分等ノ考ヘ居ル點ハ、閣下ノ陳述セラレタル所ト幾分徑庭アリト思惟スルコトナリ、自分等ハ輿論ヲ代表セルモノト考フ。

內田外相、日本ハ固ヨリ世界ノ輿論ヲ無視スルモノニ非ズ、滿洲國承認ハ條約違反ニ非ズ、我々ハ帝國ノ安全ヲ要求ス、露國及支那ハ我國ノ國防ニ對スル脅威トナルヤモ計ラレザルモノナリ、現ニ過去ニ於テ支那ノ脅威ハ日清戰爭トナリ露國ノ脅威ハ日露戰爭トナリタリ、卽チ滿洲ガ日本ノ國防ニ對シテ有スル重要性ハ、支那乃至露國ノ夫レニ對スル關係ノ比ニ非ズ。

「クローデル」將軍、本問題ヲ考フル時、現實ノ事實ヲ考慮ニ入ルベキカ、又ハ然ラザルベキカノ二ノ見方アルベキモ、現實ヲ考慮ニ入レズシテ考フルコトヲ得ザルハ明カナリ、而シテ現實ノ事態ヲ有リノママニ見テ解決ノ方法アルガ如シ、例ヘバ滿洲國ノ存在ヲ基礎トシ、之ト支那ノ主權調節ヲ爲スコトナリ、卽チ滿洲國ニ對シ支那國ノ何等カノ聯繫ヲ殘シ、支那政府ノ官吏ヲ滿洲國ニ入ルルコトヲ認メ、支那ノ主權ヲ殘スト共ニ、滿洲ニ於ケル日本ノ重大ナル利益ヲ擁護スル爲メ十分ノ支配權ヲ維持スルコトモ一案ナルベ

シ右ノ考ヘハ自分ノ私見ニシテ、又何等提案セントスル趣意ニテ申述ベタルニ非ズ、唯討議ノ爲メニ考ヘ方ヲ一言シタニ過ギズ。

「リットン」卿、我々ハ右「クローデル」將軍ノ所說ノ如ク、現實ノ事態ヲ考慮ニ入レ、日本ノ權益ト支那ノ利益トヲ調和セシムベキ方法ハ價値アルベシ。

內田外相、卑見ニ依レバ滿洲國ト支那トノ間ニ何等聯繫ヲ殘スハ、更ニ將來ノ紛糾ノ原因トナルベキコト必然ナルヲ以テ、唯一ノ方法ハ、滿洲國ヲ承認シ、支那モ滿洲國ヲ善隣トシテ認ムルニ依リ、再言スレバ、支那ハ聯繫ヲ利用シ問題ヲ後日ニ殘スコトトナルベシ、右ハ國民一般ノ意見ナリ。

「アルドロバンヂ」伯、自分ハ政府ノ意見ヲ代表セズ、個人ノ意見ヲ述ブルニ止マル、自分ハ「リットン」卿ノ意見ニ同意ス、米佛兩委員ノ考ヘニモ同意見ナリ、滿洲國ノ問題ニ關シ注意スベキハ滿洲國人民ノ問題ナルガ、滿洲國人ハ支那人ニシテ、過去ニ於テ滿洲ニ占據シタル滿洲人ハ現ニ存在セズ、此點ハ重要ナリト思考ス。次ニ最近ノ事態ニ付テハ日本ハ、滿洲ニ於テ平和及安全保障ヲ要求セラルル所、卑見ニ依レバ閣下ノ述ベラレタル方法ニ依ルモ、滿洲ニ關スル日支ノ紛爭ヲ輕減スルコトナカルベシト思惟ス。事前回復（ステータス、クオー、アンテ）ハ日本ニ取リ不滿足ナルコトハ承知スルモ、全然事前回復トナラザル解決案アルベシト思フ。支那政府代表者ハ極ク漠然ト舊制度ト異ナリタル「オートノミー」ノ考案ヲ陳述シタリ。

內田外相、滿洲ニ多數ノ支那人ノ居ルコトハ容認スルモ、彼等ハ旣ニ滿洲國人ニシテ支那ニ忠誠ナラズ、滿

洲國ニ忠誠ナリト信ズ、同國ニ三千萬ノ人民アリ、自分ハ「アルドロバンヂ」伯ノ解決案ニ同意スルヲ得ザルモノニシテ、承認以外ノ他ノ「オルターネチヴ」ヲ見出スヲ得ズ、支那ハ之ニ對シ反對スルヤモ知レザルガ、致方ナシ、然レ共支那トシテモ自ラ道ヲ發見シ日本ノ立場ニ調和スルニ至ルベシ。

「クローデル」將軍、日本ハ滿洲國ヲ承認セラルルトシテ、機會均等主義ヲ尊重セラルルモノト思考ス。

內田外相、勿論ナリ。

七月十四日午前十時四十分ヨリ十二時十分迄外務省大臣室ニ於テ會見。

內田外相、前回御話シノ滿洲國ノ地理的範圍ニ關シテ一言センニ、目下手許ニ正確ニ之ヲ表示セル地圖ヲ有セザルモ、本年三月十二日滿洲國ノ對外通告中ニ、茲ニ奉天、吉林、黑龍江、熱河、東省特別區並ニ蒙古各旗盟ノ民衆、獨立政府ヲ組織シ云々トアリ、滿洲國ノ範圍ハ此等ノ地域ヲ指スモノナルガ、右ノ中蒙古各旗盟ノ地理的範圍ハ必ズシモ明確ナラズ、此點ニ關シ注意スベキハ、一九一三年十一月五日露國ノ對支通牒中ニ、外蒙「ゴブド」等ノ境界ハ、將來露支兩國間ニ於テ協定スベキモノナリトアリ、蒙古方面ノ境界ハ露支間ニ於テモ明カナラザル點ナリ、斯クノ如ク蒙古ニ於ケル滿洲ノ境界ハ必ズシモ明確ナラズ。

「マツコイ」將軍　蒙古方面ノ境界ノ問題ハ別トシテ、山海關ニ於テモ同樣問題アリ、滿支間ノ境界ハ關外ニアリト稱セラレ居ルガ如キ處、此點ニ付テ滿支ノ間ニ爭ヒアリ。

內田外相、右ノ點ハ本大臣モ承知シ居レリ、尙ホ國家ノ境界ノ不明確ナルコトハ、何等其國ヲ承認スルコトニ對スル障害トナルベキモノニ非ズ、現ニ「ヴエルサイユ」條約第八十七條ニ依ルニ、同條約締結ノ際、

「ポーランド」ノ國境確定セラレ居ラザリシナリ。

「リツトン」卿、地圖ニ依リ滿洲國ノ境界ヲ知リタシ。

內田外相（概略ノ境界ヲ示セル地圖ヲ交付ノ上）境界ヲ明示セル地圖ヲ入手スルコトト致スベシ。

「リツトン」卿、滿洲國ニ傭聘セラレタル日本人ハ、日本國政府ト如何ナル關係ニ立ツヤ、又此等人員ハ日本國政府ノ官吏タルノ地位ヲ保有セルヤ。

內田外相、此等人員ハ日本國政府ト何等關係ナシ、日本國政府ノ官吏ニ非ズ。

「リツトン」卿、滿洲國ノ軍事顧問ハ如何、現役ノ軍人モ其內ニアルニ非ズヤ。

內田外相、軍事顧問ノ內ニ現役ノ軍人アルモ、右ハ單ニ軍事上ノ事項ニ付テ敎練シ居ルニ過ギズ、之ハ支那本部ニ於テモ同樣ナリ。

「マツコイ」將軍、自分ノ記憶ニ依レバ、滿洲國ニ傭聘セラレ居ル文官ハ、單ナル顧問ニ非ズシテ總務司長等ノ地位ヲ有ス、而シテ軍事顧問タル軍人ハ、日本ノ現役ノ儘ニテ日本國政府ヨリ俸給ヲ受ケテ居レリ。

內田外相、文官ハ滿洲國ガ其欲スル者ヲ任意ニ利用シ居リ、日本國政府ノ官吏タル資格ヲ有セズ、軍人ニ付テハ自分ノ記憶明カナラザルニ付取調ブベシ。

「リツトン」卿、次ニ一般政策問題ニ關シ、前回承リタル日本國政府ノ方策ハ決定的ナリシニ付、之ヲ再論セザルベキモ、右方策ノ實行ニ當リ、手續乃至方法如何ノ問題アリ、本委員等ハ國ヲ代表スルモノニ非ズシテ、國際聯盟ヲ代表スルモノナルコトハ申ス迄モナシ、余ハ聯盟國ガ大戰ノ結果樹立セラレタル多クノ

血ト財トノ產物ナル、此平和機關ヲ重要視セルコトヲ指摘セントス、此平和ノ機關ハ吾人ノ國際關係ト文明トノ基調ニシテ、滿洲ガ日本ノ生命線タルト同ジク歐洲ノ生命線ナリ、他ノ聯盟國ハ右平和機關ガ利用セラレムコトヲ又無視セラレザランコトヲ希望シ居レリ、前記日本ノ方策ハ少クトモ三個ノ多數國間ノ條約ニ關係シ居ル處、他國ハ日本ノ義務ニ付日本ト異ル見解ヲ有スルコトアルベシ、日本ハ支那ガ條約ニ違反シ、又一方的ニ條約ヲ解釋スルコトヲ非難ス、余ハ日本國政府ガ單獨行動ヲ取リ又ハ一方的ニ條約ヲ解釋スルコトナク、少クトモ他國ニ「インフォーム」センコトヲ希望ス、客秋壽府ニ於テハ、日本ガ何等事前ニ通報スルコトナクシテ行動ヲ起セルコトニ付非難アリタリ、本問題ニ付他國ノ感情ヲ無視セラレンカ世界ハ憤ルベシ。

他ノ各委員、（同意ヲ表ス）

內田外相、本大臣ハ國際聯盟ノ平和機關トシテノ重要性ヲ認識スルニ吝カナルモノニ非ズ、曩ニ「ヴエルサイユ」條約締結ノ際自分ハ在官中ニシテ、當時議會ニ於テ國際聯盟規約ハ國際關係ノ「マグナ、カルタ」トナルベシト告ゲタルコトアリ、而シテ日本モ爾來聯盟規約ヲ尊重シテ行動シ來レリ、然レドモ滿洲問題ハ日本ニ取リ極メテ重大ニシテ且ツ日本ノ生死ノ懸ル問題ナリ。

日本ハ固ヨリ條約ニ牴觸スルノ行動ヲ爲ス意思ナキハ當然ナルモ、此問題ハ日本ノ安全保障ノ問題ニ關係シ、又自衛權ノ發動ニ關係スル問題ナリ、曩ニハ日本ハ本問題ハ日支間ニ直接交渉ニ依リ解決セラルベキモノトナセルモ、既ニ滿洲國ノ獨立宣言アリタル以上、他ノ日支間紛爭問題ニ付テハ兎ニ角、滿洲國ニ付

テハ日本ハ支那トモ討議スルノ餘地ナシ、本問題ハ既ハ終了セルモノト認ム、支那ハ此日本ノ決心ヲ知ルヲ要ス、今ヤ殘レル唯一ノ點ハ、滿洲國ノ存在ヲ支那ガ承認スルヤ否ヤノミナリ、繰返シテ申上ゲタキハ日本ハ何等條約ヲ無視セントスルモノニ非ザルト共ニ、又條約違反ヲ敢テセルモノトモ思惟セズ。

「リットン」卿、自分等ノ申上ゲタキハ、問題ガ自國ノ重大利益ニ關係アリタリトテ、國際的方法ニ依リ處理シ、又ハ他國ニ對スル義務ヲ尊重スベキ義務ヲ免ルルモノニ非ザルコト是ナリ、右ヲ免ルル如キ理論ガ行ハルレバ聯盟ハ破壞セラルベシ。

日本ガ決定セラレタル方策ヲ實行スルニ當リ二途アリ、一方的ニ行フカ又ハ國際的方法ニ依リ他國ニ通報ノ上行フカナリ、後者ノ方法ニ依ルハ他國ガ同意スルト否トニ拘ラズ他國ヲ理視シ感情ヲ害スルヨリハマシナルベシ、一方的行爲ハ事態ヲ惡化ス。

內田外相、卑見ハ貴委員等ノ所見ト稍々異ル點アリ、日本ハ聯盟ヲ無視スルモノニ非ザルモ、本問題ハ聯盟ニ懸ルベキ性質ノモノニ非ズト思フ、九國條約ニテモ自衛權ヲ除外シ居レリ、聯盟ハ未ダ發達ノ途中ニ在ルモノニシテ、總テノ國際關係ヲ律シ得ルモノニ非ズ。

「リットン」卿、聯盟ハ總テノ國際關係ヲ律セントスルモノニ非ズ、各國ハ主權ヲ保持スルモノナルモ、日本ガ本問題ニ付他國ト協議スルコトナクシテ行動セラレザランコトヲ希望ス。

內田外相、出來得ル限リ他國ノ利益ヲ尊重シ、又之ト連絡ヲ取ルベキハ勿論ナルモ、前ニ述ベタル如ク、一國ノ重大ナル利益ニ關シ又ハ自衛權ニ關係アル問題ニ付テハ、他國ト相談セザルノ已ムヲ得ザルコトアル

ベク他國モ同樣ノ場合同樣ノ行動ニ出デ出レリ。

「アルドロヴアンヂ」伯、貴大臣ノ自衞權ニ關スル所見ヲ伺ヒ、滿洲問題以外ニ付テハ支那ト懸案交渉ノ用意アルコトヲ承知シタル處、本委員會ハ滿洲問題ノミナラズ、日支關係及其改善ノ可能性ニ付調査ヲ爲シツツアルモノナルガ、滿洲ハ日本ニ取リ重大ナル利害關係アルト等シク、支那ニ取リテモ同樣重大利害關係アリ、而シテ我々調査委員又ハ聯盟ノ立場トシテ之ヲ除外スルヲ得ズ、又委員會任命後滿洲國ノ獨立アリシトスルモ、是レ一ノ附加的事項ニシテ、等シク委員會ノ研究スベキ所ナリ、尙ホ委員會ハ日本ノ提案ニ依リ任命セラレタルモノナリ。

內田外相、滿洲ハ支那ニ取リテモ重大ナルヤモ知レザルガ、日本モ之ニ付如何ナル讓步モ爲シ得ズ、支那ガ右樣ノ態度ヲ採レバ容易ニ解決ノ途ナシ、卑見ニ依レバ滿洲問題ハ此儘日支ノ間ニ放任セラルル方解決ニ資スル所以ナリト思惟ス、支那ハ引續キ聯盟其他第三者ガ干涉シ、之ニ依リテ領土ヲ回復シ得ンコトヲ期待シ居リ、之ガ兩國間ノ永キ紛爭ノ原因ナリ支那ガ日支間ニ解決セザル可ラザルコトヲ悟ラバ、何時カ解決ノ日アルベシ、自分ハ聯盟ガ仲介シ、支那ニ對シテ問題解決ノ爲メ此上聯盟ニ倚賴スベキモノニ非ズト云ハレンコトヲ希望ス、其結果ハ事態改善ニ資スベシ、委員會ガ其離歐後成立シタル滿洲國ヲ研究セラルルコトハ何等異存ナシ、余ハ委員會ガ日本ノ見解ニ同意サレンコトヲ希望スルモ、同意セラレザルモ遺憾ナガラ致シ方ナキ所ナリ。

「マツコイ」將軍、自分等ハ將來ニ於ケル極東ノ平和ノ爲メニ國際聯盟ガ貢獻シ得ベキ點ヲ考ヘ居ルモノナ

リ、貴大臣ハ日本ガ完全ナル自由行動權ヲ得ルニ於テハ卽チ平和ガ招來セラルベシト言ハルルガ如シ、然レドモ他國ノ立場ヲ考慮セズ、日本ノ行動ヲ基礎トシテ國際平和ヲ招來シ得ベキ可能性アルヤヲ考フル必要アリ、貴大臣及荒木將軍ノ言ハルル所ニ依レバ、結局唯一ノ可能ナル平和ハ日本ノ平和ナリ、自分ハ軍人ナルガ、假リニ自分ガ滿洲ニ於ケル日本軍人ノ立場ニ置カレ、局限セラレタル情報ノミヲ有セルモノトセバ、恐ラク自分モ右日本軍人ト同一ニ考ヘ又行動シタルナルベシ、然レドモ自分ハ別ノ立場ヨリ物ヲ考ヘザルヲ得ザルモノナリ、委員會ハ一國ノ國民ニテハ聞キ得ザル所ヲ聞キ得タリ、其蒐メタル多クノ情報ハ聯盟ニ報告セラルベキガ、當時日本ノ重大利益ニ對シ何等切迫セル危險ナク、支那軍ハ日本ニ對シ積極的行動ヲ取ル可ラザル旨命令ヲ受ケ居タリ、日本ガ聯盟ニ向ツテ自衞ノ爲メ行動セリト謂ハレンモ、委員會ハ日本ノ重大利益ニハ何等切迫セル脅威ナク、單ニ長キ期間ニ亘ル繼續的刺戟ガ高潮ニ達セルノミナリシコトヲ述ブルノ義務アルベシ。

（外相註「マツコイ」將軍ハ直接內田ニ向ヒ話カケズニ、必ズ「リツトン」卿ニ向ヒ同卿ト談話スル姿勢ヲ取リ、同卿ハ將軍ノ話ヲ引受ケテ內田ニ尋問スルコトトナリ、勢ヒ內田ノ答ハ「リ」卿ニ對スル傾トナル」

「リツトン」卿、余ハ本問題其他日本國政府ト論ジタキ多クノ問題アルモ、日本國政府ハ委員會ノ報告ヲ待タザルコトニ決定セラレタルヲ以テ、右ハ遲キニ失セルガ如シ、日本ノミナラズ支那亦聯盟國ナル處、支那ハ日本ニ規約違反ノ侵略行爲アリトシテ聯盟ニ救正ヲ求メタリ、何レガ侵略者ナリヤ日支ノ見解相異ス

此點世界ガ刮目シテ聯盟ノ裁斷ヲ待テル所ナリ、委員會ハ其報告發表前日本國政府ノ一方的行爲ヲ差控ヘラレンコトヲ要望セント欲シタリ、問題ノ核心タル自衛權又重大利益ノ問題ガ未ダ決定ニ至ラザルヲ以テナリ。

「クローデル」　將軍、滿洲國ノ成立ハ新事態ニシテ、日本ニ取リ有利ナルヲ以テ、日本ハ之ニ對シ好意的ノ態度ヲ執リ又之ヲ重要視セラルル處、假リニ此事實ナカリセバ、滿洲問題ニ關シ他ニ重要ナル「コンシダレーション」アリヤ。

內田外相　生死ノ懸ル問題ニ付テハ何レノ國民モ直接行動ヲ取ラザルヲ得ズ、支那ハ常ニ聯盟ニ訴ヘ居ルモ滿洲國ノ問題ハ日本ノ重大利益及極東永遠ノ平和ノ見地ヨリノミ考察セラレザル可カラズト云フノ外ナシ右以外ニ本問題ヲ解決スルノ實際的方法ナシ、聯盟ハ規約ノミナラズ現地ノ必要ヲ考慮ニ入レザル可ラズ支那ハ餘リニ永ク日本ヲ弄ビ、歷史的事實ト條約義務トヲ無視シタル爲メ、日本國民ノ忍耐ハ遂ニ破裂セリ、余ハ此點ニ關シ是レ以上論議ヲ好マズ。

「リットン」　卿、閣下ハ委員會ノ職能及目的トスル所何レニ在リト思考セラルルヤ、又其報告ニ何ヲ期待セラルルヤ。

內田外相、貴委員會ノ任務ハ現地ノ實狀ヲ調査シ、之ヲ聯盟ニ報告セラルルコトト了解ス。

「リットン」　卿、自分ハ玆ニ法律上ノ問題ヲ提起セントスルニ非ズ、政治的ニ日本ガ本委員會ニ對シ何ヲ望マルルカヲ伺ヒタル次第ナリ。

內田外相　御質問ニ對シ答辯スルコト仲々困難ナリ、貴委員ハ日支兩國政府ノ受諾シ得ベキ何等カノ方法ヲ發見セント欲セラルト推測ス、自分モ之ガ爲メ相當ノ時間ヲ費シタルモ、右ノ如キ方法ノ發見不可能ト思考スルニ至レリ、日本ハ支那ト隣接シ之ト長キ交涉ヲ行ヒ來レルモノニシテ、支那ヲ了解セルコト列國以上ト思フ、古人ハ支那ハ之ト交涉スルニ最モ困難ナル國ニシテ、又條約ヲモ容易ニ無視シ、信賴スルコトヲ得ザル國ナルコトヲ知レリ。

「リットン」　卿、閣下ノ所謂重大利益及自衛ガ委員會ノ調査セントスル題目ニシテ、元來委員會ハ日本國政府ガ提案セラレタルモノナルコトヲ再言セントス、日本國政府ノ執ラントスル行爲ハ、論點ヲ獨リ決メセルモノナリ。

「マツコイ」　將軍、聯盟ノ重大利益ハ極東將來ノ平和ト紛爭ノ防止ニ在リ、過去ニ於テ極東ハ平和ヲ缺キ、日本ハ滿洲ニ於テ再度戰ヘルモ、未ダ平和ヲ招來シ得ズ、委員會ノ任務ハ滿洲ニ於ケル日本ノ重大利益ヲ安固ニシ戰爭ノ再發ヲ防グ解決法ヲ發見スルニ在リ、問題ハ一國ノ一方的立場ノミヨリハ解決シ得ズ、他國モ關係シ居レリ、委員會ノ問題ヲ日支露其他諸國ノ立場ヨリ研究セリ、自分ハ日本ノ豫期セラルル狀況ハ永久ノ平和ヲ確保シ能ハズト信ズ、委員會ハ未ダ何等決論ニ達シ又ハ何等ノ勸告ヲ起案シ居ラズ、依然白紙ニシテ引續キ各當事國ノ利益ヲ調和シ、極東ガ從來獲得シ能ハザリシ平和ノ基礎ヲ發見スルニ努メントス、余ハ最近ニ於ケル日本ノ歷史ヲ研究シ、其政治家ノ聰明ニ感ジタルモノニシテ、日本ノ有識者ハ公平ナル聯盟委員會ノ到達スベキ勸告ヲ考慮セラルベキヲ期待ス、余ハ日本ガ壽府ニ於ケル議論ニ依リ刺戟

セラルヲ知リ、又日本ノ利益ニ同情スルモノナリ、而モ尚ホ日本ガ問題ヲ大局高處ヨリ取扱ハレンコトヲ希望ス。

（外相註、前記同斷）

「リットン」卿、委員會ノ希望スル所ハ一ニ日本ノ地位ヲ平易ニセントスルニ在リ、今論議シ居ルハ日本國政府ノ執ル手續方法ノ問題ナリ、閣下ヨリ閣僚ニ對シ他國ヲ出シ抜クノ不得策ナルヲ指摘セラレタシ。

內田外相　此點閣僚ニ諮ル餘地ナシ、一國ノ自衞ノ問題ガ關係スル場合ニ條約違反ノ問題發生スルモノト思ハヌ、一國ノ重大ナル利害ニ關係スル問題ニ付テハ、他國ニ通告セズシテ行動スルコトアルベキモノナリ

「リットン」卿、滿洲ノ政治組織ガ如何ニナルトスルモ、滿鐵ト其他諸鐵道トノ關係ニ關スル諸問題及滿鐵ノ競爭線タルコトヲ避ケテ同地方ノ開發ニ必要ナル鐵道ヲ建設スル問題等ニ付、包括的解決ノ必要尚ホ存スベク、閣下ハ前滿鐵總裁トシテ問題ヲ詳知セラルルコトト存ス。

內田外相　鐵道問題ニ關スル過去ノ紛爭ニ付テハ、參與委員ヨリ書類ヲ提出シ居ルモノト承知ス、舊政權時代ニ於テハ鐵道問題紛糾シタルモ、九月十八日事件以後我方ハ滿洲國政府ト極メテ友好的關係ニ在ルヲ以テ、既ニ困難ナル問題消滅セリ、目下滿鐵ハ總テノ他線ヲ運轉シツツアリ、舊政權離散スルヤ同會社ハ滿洲國側ノ希望ニ依リ技術者ヲ派遣シ、四洮及其以北ノ線、吉長及敦化ノ線、吉林、海龍、奉天ノ線ヲ經營シ居レリ、又吉林省長ハ敦化ヨリ朝鮮國境ニ至ル線及長大線ノ建設ニ關シ契約ヲ更新シ、財政上及技術上ノ援助ヲ滿鐵ニ要求シ來リ、此等諸線ハ近ク建設セラルベク、其他多クノ線モ建設セラルルコトトナルベ

キ處、右建設ガ其能力アル唯一ノ團體ナル滿鐵ノ手ニ依リ行ハルルコトハ日滿双方ノ利益ナリ、又新線ノ管理經營ハ將來ノ契約ニ俟ツベキ處、滿洲國ニ於テ鐵道網發達スルニ至ラバ、同國ハ今日以上更ニ開發セラルベク、全世界ノ利益ナリ。

吉田大使（滿鐵ノ運轉シツツアルハ總テノ線ニハ非ルコトヲ述ブ）

「リットン」卿、然ラバ日本側ハ現狀ニ對シ滿足セラルル次第ナヤ。

內田外相、然リ。

「リットン」卿、所謂滿洲ニ於ケル日本國行政機關ノ統制ニ付テ伺ヒタシ。

內田外相　本問題ハ純然タル國內問題ナルガ、最近新聞ハ此問題ヲ實際以上ニ報導スル傾キアリ（トテ在滿諸機關ノ命令系統ヲ說明シ）自分ハ滿鐵總裁トシテノ經驗ニ徵スルモ、從來ノ制度ニ對シ大ナル不便ヲ認ムル次第ニ非ザルカ、之ヲ統制スルコトハ有益ナリト思考シ居レリ、例ヘバ警察ノ問題、警察ト守備隊トノ問題ノ如シ。

「リットン」卿、既ニ何等決定セラレタル次第ナリヤ。

內田外相、未ダ決定ノ域ニ達セズ、決定迄ニハ尚ホ相當ノ時日ヲ要スルモノト思考ス。

「リットン」卿、次ニ日本ト支那及滿洲國トノ條約關係ヲ伺ヒタシ、過去ニ於テ滿洲ニ關スル日支關係ハ一九〇五年ノ條約一九一五年ノ條約ヲ基礎トセル處、日本國政府ハ此等條約ニ關シ最早支那政府ヲ相手ニセズ、新規ノ條約ヲ滿洲國トノ間ニ協定スル意嚮ナリヤ。

內田外相、滿洲國ハ既ニ既存條約ヲ尊重スルコトヲ聲明セリ。

「リットン」卿、然ラバ滿洲國ハ此等ノ條約上ノ義務ヲ繼承スルコトトナルベキカ。

內田外相、然リ、從テ滿洲國承認ノ場合ニハ、同國ト此等事項ニ關シ新條約ヲ協定スルコトモ一方法ナルベキカ、又必ズシモ斯クノ如キ方法ヲ採ル必要モナカルベシ。

「リットン」卿、然ラバ右二條約ニ關シ日本ト支那トノ關係如何換言スレバ右二條約中支那本部ニ關スル條項ハ日支兩國間ニ依然効力ヲ存續スベキモノナリヤ、之ガ問題ニ關シ何等調節ヲ爲ス必要ナキヤ。

內田外相、右ハ複雜ナル條約上ノ關係アルヲ以テ只今卽答スルコト困難ナリ。

（右ニ對シ「リットン」卿ヨリ吉田參與委員ニ、此問題ハ後ニ北京ニ於テ日本側ノ意見ヲ聞クコトトナルベキヲ以テ、右含ミ置カレタシト述ブ）

日本追加覺書

以上ハ調査委員側ノ作成セル會談錄ヲ日本側ニテ一二正誤セルモノノ飜譯デアルカ、右會談ニ於ケル內田外相ノ應答ハ不充分且無愛想ダッタノデ、之ヲ補正スル爲メ左ノ覺書ヲ調査委員ニ渡ス樣、同委員ト共ニ北平ニ赴ケル吉田參與委員ニ七月二十二日電命シタ。

余ハ外務大臣ノ訓令ニ依リ、內田伯爵ガ大連及東京ニ於テ貴委員トノ會見ニテ爲セル陳述ノ摘要ニ、追加註記ヲ加ヘタルモノヲ、貴卿ニ移牒スルノ光榮ヲ有ス。

一、曾テ大連ニ於テ余ハ閣下ニ對シ過去二十五年間種々ノ資格ニテ滿洲ニ關シテ得タル余ノ經驗ヲ基礎トシ、自己ノ見解ヲ率直ニ開陳スルノ機會ヲ得タルカ、其要綱ニ付今外務大臣トシテ當時ノ見解ヲ變更スベキ何物ヲモ發見スルコトヲ得ズ。

二、東亞ニ於テ近年發生セル總テノ國際紛爭ハ主トシテ、第一ニ不統一ニシテ無統制ナル支那ヲ、完全ニ組織立チタル國家ト看做ス事實ニ歸スベク、第二ニハ國外ヨリ輸入サレタル共產主義ニ依リ甚ダシキ感化ヲ受ケタル國民政府ノ革命的外交政策ニ歸スルヲ得ベシ、而シテ支那現在ノ事態ノ爲メニ苦シムモノハ、單ニ日本ノミニ非ラズシテ、支那ニ重要利益ヲ有スル列强亦同樣ナリ。

三、諸列强ガ右ノ爲メニ蒙ル災害ヲ、聯盟規約、九國條約、不戰條約、又ハ其他ノ國際平和維持ヲ目的トスル現存條約ノ援用ニ依リテ補正セントスル試ミハ、不幸ニシテ極度ノ困難ニ逢着ス、事實ニ徵スルニ、列强ハ支那ニ於ケル其權益ガ現ニ危殆ニ陷リ又ハ之ニ瀕スル場合、自己ノ有スル手段方法ニ倚ルヲ慣例トス、支那ノ近代史ハ此種先例ニテ充滿シ、列强ハ自己ノ計算ニ於テ、其利益ノ損害ニ對スル補償又ハ之ガ防止ヲ實行シ居レリ。

四、日本ハ歷史上及地理上他國ニ比シ支那ト遙ニ緊密ナル關係ニアリ、又支那ニ於テ廣大ナル利害ヲ有スルガ故ニ、前記ノ如キ支那ノ變態狀況ノ爲メ、他國以上ニ苦痛ヲ感ゼザルヲ得ズ。日本ハ支那ガ更生シ且ツ東亞ノ平和維持ノ爲メニ眞摯ナル常軌ニ入ランコトヲ、期待スルコト二十年以上ニ及ベリ、殊ニ華府會議ノ引續キトシ、我々ハ最大ノ忍耐ト自制トヲ爲セルガ、支那ノ事態ハ何等改善ノ跡ヲ示スコトナク、却

ヲ甚ダシク惡化セリ。支那ノ挑發ハ益々加ハリ、我國民ノ感情ハ之ニ直面シテ高潮ニ達セル際、日本ガ支那及露西亞ノ侵略ヲ防止スル爲メ國運ヲ賭シテ二大戰爭ヲ爲シ又亞細亞大陸ニ於ケル我國死活利益ノ集中スル滿洲ニ於テ、九月十八日ノ突發事變ハ生ジタリ、我々ハ自衞ノ爲メ斷乎タル處置ヲ採ル以外、他ニ何等ノ手段ヲモ有セザリキ。

五、日本ノ行動ノ結果、滿洲ニ於ケル張學良政權ハ消散シタルニ付、學良秕政ノ下ニ長年間呻吟シ、長城以南ノ絕エザル內爭ニ滿洲ヲ投ゼシメタル其政策ニ反對セル滿洲ノ要人ハ、此機會ヲ捕捉セリ。滿洲ハ地理上又人情風俗上、支那本部ト全然別個ノ境域ナリ、住民ノ大部分ハ支那民族ナルモ、其多クハ飢饉、洪水、暴政、虐壓ノ爲メ支那本部ノ故鄕ヨリ逐ハレ、日本ノ警備及企業ニ依リ比較的安全ト利益トヲ享受シ得ル滿洲ニ、新生活ヲ求メンガ爲メニ來レル者ナリ。加之歷史的ニ見テ、滿洲ハ支那ノ純然タル一部ヲ構成シタルコト曾テ無シ、殊ニ最近數十年間支那本部ノ政權ガ滿洲ニ及バザリシコトヲ證明スル事實ハ頗ル豐富ナリ。

滿洲國ノ建設ハ多年間潛在セル革命氣分ガ、日本ノ自衞權行使ニ關聯シテ表面化シ、滿洲ヲ支那ヨリ區分スル特異性ニ基ク結果ニ外ナラヌ、故ニ滿洲ノ獨立ハ純然タル支那ノ政治的分解現象ト看做サルベキモノナリ。

六、滿洲問題ノ解決ニハ幾多ノ考案アルベシ、日本國政府ノ所信ニ依レバ、本問題ハ滿洲ノ安全及安定並ニ東亞永遠ノ平和ノ見地ヨリ決定セラルベク、事態ヲ不定ニ置キ爲メニ將來永ク紛爭惹起ノ禍根ヲ殘スガ

如キ過誤ハ、決シテ之ヲ爲サザルニ在リ、若シ便宜的又ハ折衷的姑息手段ノ採用ニ依リ、九月十八日事變以前ト類似ノ事態ヲ滿洲ニ復活セシムルガ如キハ、到底認容シ得ザル所ナリ、故ニ余ハ滿洲ニ於テ反日的且ツ不秩序ノ事態ヲ惹起スル虞アル如何ナル考案ニモ同意スルコトヲ得ズ。

加之支那本部ノ腐敗不淨ナル政權ヨリ全然分離シ、誠實有能ノ政府ヲ建設セントスルノ意思ヲ、屢々聲明セル滿洲國官憲ガ、其理想ト抱負ヲ全然崩壞スルガ如キ考案ニ同意スベシトハ思ハレズ。

余ハ滿洲國ノ存在ニ何等ノ考慮ヲモ拂ハザル考案ガ、滿洲ノ秩序及安定並ニ東亞ノ靜寧ニ貢獻セザルベキヲ確信ス。

七、新國家又ハ新政府ノ承認ハ、他國ノ選擇又ハ嗜好ノ行使ニ懸ル事柄ニ非ズシテ、國際交通ノ必要ニ依リ其國ニ强イラレタル手段ナリ、一國ガ現ニ其最モ近キ地方ヲ、支配スル政府ヲ總テノ實質的權力ト權原ヲ缺キ又國外ニ代表權ナキモノト看做スベキコトヲ、瞬時タリトモ强要セラルルガ如キハ、正ニ其堪ヘ得ザル所ナリ。滿洲國ハ前記ノ如ク是迄壓迫セラレシ住民ノ地方的自決運動ノ結果生ゼシモノナレバ、其存在ヲ承認シタレバトテ、日本ガ其條規ヲ嚴正ニ遵守セントスル九國條約ト相容レザル何等ノ問題起ルベキ筈ナシ、右條約ノ目的ハ事實上ノ政府ヲ正當トスル萬國公法ノ慣行的且ツ正規的運用ヨリ此地方ヲ除外セントスルモノニ非ズ、又軋轢ヲ無窮ナラシメントスルニモ非ズ。支那ハ常ニ無政府狀態ニ置カルルヲ要シ支那領土ノ如何ナル部分モ平和及安全ノ地域トシテ自立スルコトヲ許サレズ、其領土ハ文化各國ニ依リテ軋轢ト不統一ノ沼澤ニ追込メラルルヲ餘儀ナクサルルヲ要ストスルガ如キハ、全然同條約ノ條規ト正反對

ナリト云ハザル可ラズ。之ヲ要スルニ九國條約ハ支那各地ニ於ケル支那人ガ其自由意思ニ依リ獨立國ヲ建設スルヲ禁ゼズ、從ツテ斯クノ如クシテ設ケラレタル新國家ヲ承認スルコトハ條約違反ヲ構成スルモノニ非ズ若シ滿洲國ニ日本及其他ノ諸國ガ公正ニシテ無阻碍ノ機會ヲ與フルニ於テハ同國ハ速カニ强力且ツ安定セル國家ニ發育シ、支那ニ强力且ツ安定セル政府成立ノ爲メニ、最モ必要ナル指導ヲ提供スベキヲ疑ハズ。

第十一章　滿洲事變ト國際聯盟（四）

滿洲國承認

以上ニ依リ明ラカナルガ如ク、帝國政府ノ對滿洲國態度ハ極メテ直截ニ「リットン」卿初メ他ノ調査委員ニ通達サレタ。卽チ帝國ノ滿洲國承認ハ既ニ不動ノ方針デ、殘ルハ單ニ其時期丈ケデアルガ、之モ頗ル差逼ツテ居ルコトハ容易ニ看取セラレル、帝國政府ハ着々既定方針遂行ノ步ヲ進メ、八月八日武藤大將ヲ關東軍司令官ニ補スルト同時ニ、滿洲派遣臨時特命全權大使ニ任ジ、其月二十日東京ヲ出發スル同大將ノ携行スベキ日滿議定書案ヲ十九日ノ閣議デ決定シタガ、臨時議會ハ二十二日ヨリ開カレ、二十五日內田外相ハ其施政演說中ニ滿洲國ノ承認ガ正當且ツ適法ナコトヲ詳述シタ。同外相ハ之ニ關シ在外使臣ニ電報シテ「此後モ此演說ノ「ライン」ニ依リ飽迄强硬ニ我方ノ立場ヲ主張シ置ク考ニテ、今更政府ニ於テ此趣旨ニ矛盾スル措置ニ出ヅル如キ事アランカ、啻ニ我方ノ對外的主張一貫セザル事トナリ、我方ノ足元ヲ見透サルル虞アルノミナラズ、內政上等ニモ意外ノ紛糾ヲ招來スベキニ付、出先ニ於テモ右趣旨ヲ體シ、此上トモ帝國ノ立場擁護方ニ付啓發其他萬遺憾ナキ樣善處セラレタシ」ト訓令シタ。

斯クノ如キ事態ニ直面セル調査委員ガ、如何ナル心境デ東京ヲ立チ、又北京デ談議シツツアルカハ、大凡ソ想像スルコトガ出來ル、從ツテ其報告書ガ我方ニ取リ相當好都合ラシイト云フ今迄ノ觀測ハ裏切ラレテ來タ